

第8章 神の私物化と、神の消失

世界の拡大により、神の領域が世界との境界に張り付き、神の居場所は言葉だけになる。そして私のほうは、自己の大きさになった。

ここで神が消失する。

第8章1項 神の領域の消失

世界を、論理と科学で解明する。

この考は、世界の関係性の安定と強さを基準に、すべてを言葉に置き換える作業である。したがって、世界以外の領域である神と領域は、存在しないということになる。

関係性を追うこの考えは、認識の上では、正統な考えなので最終的に、神の領域がなくなる。しかし神は、私と同期しているため、科学と理論だけではなくならない。神の領域は境界として、世界の外側に張り付くことになる。

第8章2項 私の自己化（世界の中心の私）

私は、自己と帰属領域を含んだ存在として成立したが、論理と科学がこの領域を、区分する。

基本的に、私と世界の接点から、私に向かって開始される。帰属組織には、名前が付けられ、活動も定義される。そして私に帰属している道具などは、私の持ち物になる。

私の、内部も定義されるが、自己を支える主観は、生きる活動が伴っており、見る側に立つので、私としか定義できない。そして私は、自己と同じになる。世界を常に自己から見るため、世界の中心に私（自己）が存在することになる。

自己は、自己を認識できないので、私は空洞化することになる。

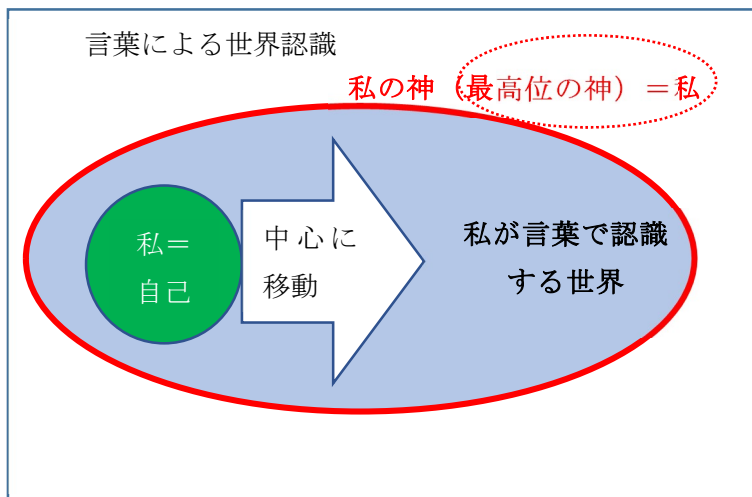
そして世界と神は、私のために存在する。

第8章3項 神の消失

私と自己が同じになると、神が、人と人の間で、共通性を失い始める。人それぞれの神に、変わることになる。

この神は、他者から見ると、自己を基盤とし私と、区分できなくなる。

私にとっての最高位の神となる。



そして神と私の差異がなくなり、関係が強く安定的になる為、神としての区別を認識できなくなる。実質的に消失する。

神が消失すると神の領域が、世界を認識するための境界になる。